

巻頭言

この小冊子は、研究室のメンバー向けにまとめた、2012 年度の研究室の記録です。

この 3 月の日本化学会年会（立命館大）では、研究室のセッションができました。新人も聴衆として参加してくれました。昨年度の本冊子を開くと、一年前の学会要旨も載っています。見直してみると、すべての研究テーマが大きく生成変化し、斬新な展開を遂げていることに、改めて気づかされました。学会後の懇親会に、卒業生が参加してくれるのも嬉しいことです。次年度は、連続セッションにします。

今年度は、専攻長を外れたことで、研究教育に割ける時間が前年度よりは確保できましたが、留学生への対処で恒常的に時間と労力を割られました。学内では化学教育部会の外部評価もありました。京大での集中講義の際に、卒業生の研究室を訪問できたことも嬉しい出来事でした。

今年の企画を振り返ります。篠田先生には、今年も技術英語の講義に来て頂き、重ねて感謝です。新田先生をお招きし、研究室内で英語研修・英文メール講座を実施しました。学内の国際コミュニケーションセンターも有効利用しました。本学では英語アフタースクールが設けられてはいますが、それらは英会話が主目的ですから、このように自前で工面しました。こうしたアレンジは、実は前任地での私自身の講義経験を踏まえたものです。もちろん、研究室で第一に必要なのは研究の方法論を学ぶことです。しかし、プレゼンや論理的な論文構築の方法を学ぶことは、研究の質自体を上げます。「書いて考える、書きながら考える」ことは、アイデアマラソンの樋口先生も言われていることです。

今年度の修士修了者をみると、卒業時には、卒研配属時とは別人と見違えるほどの仕事力を身につけているのが実感されます。「進歩と成長」は研究室のミッションです。卒業生の前途を心から祈ります。今年の卒業生の成長ぶりは実に頼もしいもので、私にとっては研究室教育を考え直す契機ともなりました。研究室での私の実感ですが、残念ながら学生が怠惰に映ります。例えば、資料を読むように言っても読まない人（あるいは、研究室には朝から来るよう言っても来ない人）が少なくありません。これを「仕事のできる人」に変えるにはどうしたらよいか。単に入試難易度を考えても、本学には真に怠惰な人は居ないはずですが、本学では、最低の努力で要領よく試験に通ることを訓練され、得意とする学生がおそらく多数ですから、試験にも出ず、強制されないことは、やらずに済ませるだろうということに思い当たります。しかし、これでは実質的に怠惰と変わらず、進歩も成長もありません。

結論ですが、研究室では、上に書いたような問題の所在に自ら気づき、早く態度を切り替えることが「進歩と成長」につながります。今後の人生で必要なのは、「最低限の努力で要領よく」ではなく「要領よく最大限の努力」ができることです。

そこで新年度は、教育に力を入れます。昨年度と同じ締めになりますが、卒業後、数十年経ってからも「この研究室で学んでよかった」と言われる研究室を作りたいと思います。この趣旨は、研究室の Web ページにも載せてあります。

（2013 年 3 月 持田）